



事例

3

普通科高校

大阪府立 和泉高校

「英語超人」と「IM」で得意技を身につける

大阪府立和泉高等学校は、大阪府岸和田市にある全日制普通科高校である。1901年に創立された郡立泉南高等女学校(のち岸和田高等女学校)を前身とし、110年以上もの伝統をもつ。「自主・自立」を校訓に、現在では、28のクラス(1年9クラス、2年10クラス、3年9クラス)が設置され、男子557名、女子562名の計1,119名が学んでいる(2011年4月1日時点)。

和泉高校では、「いかなる国際情勢の中でも生き抜く人材育成-10年後、20年後を見据えた教育を-」を目指す教育として掲げている。これは、民間人・全国最年少校長として、2010年に就任した中原徹校長の考えを色濃く反映した学校基本方針でもある。バブル期から20年、日本を取り巻く国際情勢は大きく変化し、IT化とグローバル化が進む中で、「世界基準で認められる人材」を育てたいという考えからである。

「うちの生徒は高校時代のザッカーバーグ(注1)を驚かせることができるだろうか」「韓国の高校生ができるのに、なぜ日本の高校生ができないのか」といったように、中原校長の頭の中には常に地球儀がある。中原校長の教育に対する課題認識、和泉高校の教育目標や今後の展開、大学に期待することなどについて、お話をうかがった。

低すぎる日本人のプレゼンス

中原校長は、米国の大手法律事務所のパートナー弁護士から転身した異色の経歴の持ち主。日本を飛び出し、海外の厳しい競争社会に身を置く中で、日本人のプレゼンスの低さ、圧倒的な英語力不足とアウトプット下手を痛感し

た。「このままでは日本はアジアの中堅国になってしまう」といった危機感から、日本の外交や教育への関心を高めていったという。「国際社会で通用する人を育てたいとの想いを実現するには、何より現場に身を置いて、カリキュラムを変えたかった」と中原校長は語る。特に、生徒が自分の言葉を理解できるであろう「高校」という現場に着目し、2010年4月、和泉高校に校長として就任することとなった。

就任当初の和泉高校のイメージは「和泉温泉」「和泉牧場」といった言葉で例えられるように、「ぬるま湯につかった」状態だった。同レベルの競争校がこの地域にはないこともあり、入学時には2分の1が関西の難関大学への進学が期待できるレベルの学力を持ちながら、実際に卒業する際には4分の1しか進学できないという実態があった。こうした状況をふまえながら、「学校教育計画」の重点事項として、①進路指導の強化、②自分の意見を堂々と言える能力の育成、③得意技を身につける意識をもたせる——の3つを柱に教育改善を行っている。以下で、その特徴的な取り組みを紹介していきたい。

学校設定科目「英語超人」

海外経験豊富な中原校長は、国際社会でコミュニケーションを取るためには、英語を“話す”能力を特に重視している。「話す力を鍛えるには、TOEIC®ではなく、TOEFL®



中原 徹 校長

図表1 平成23年度教育課程表

単位	類型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	
1年		国語総合			現代社会	数学I	数学A	化学I	体育	保健	芸術I	英語I	英文法	家庭基礎	情報C	IM	ホームルーム																	
2年		現代文	古典	世界史A	日本史A 地理A	数学II	数学B	理科総A 英語超人	物理I 生物I	理科総B	体育	保健	芸術II	英語II	ライティング (英語I)	ホームルーム																		
3年	理系	現代文	リーディング (英語)	英文法 演習	体育	数学III	数学C	化学II	物理II 生物II	物理演習 生物演習	政経 倫理	古典演習 英語標準 演習	総合	ホーム ルーム																				
	文理系	現代文	リーディング (英語)	英文法 演習	体育	英語 構文演習	古典	数学演習 IA	数学演習 IB	生物II	化学II 生物演習II 化学演習I	選択科目 (4単位)	総合	ホーム ルーム																				
	国公立 文系	現代文	リーディング (英語)	英文法 演習	体育	英語 構文演習	古典	数学演習 IA	数学演習 IB	古典演習	地理歴史	地理歴史 演習	政経 倫理	生物演習I 化学演習I	総合	ホーム ルーム																		
	私立 文系	現代文	リーディング (英語)	英文法 演習	体育	英語 構文演習	古典	古典演習	地理歴史	地理歴史 演習	選択科目 (8単位)	総合	ホーム ルーム																					

を授業に生かしたい」と考えていた。

そこでまず着手したのが、平日30分と、土曜日に70分の授業を4コマ実施する「コミュニケーション英語講座」(英会話講座)の開講である。TOEFL®をいきなり授業に導入することには英語教員のみならず生徒・保護者にも抵抗があるかと考え、まずは自分自身が英会話を直接生徒に教えることにより、生徒のニーズ、考え方、英語力を把握することに努めた。自分の英語講座にどれほど生徒が関心をもってくれるか心配していたが、約180名の申し込みがあり、「生徒の支持に勇気もらい、第一歩が踏み出せた」と語る。中原校長は、自ら英語を教える中で、生徒・保護者が既存の「使えない」英語教育に諦めに近い思いをもっていることを強く感じ、英語教員にTOEFL®を授業に入れて、新しい英語教育を行うことを提案した。しかし、何十年間も変化を嫌ってきた教員集団に、民間出身、しかも海外に身を置いていた若手の国際弁護士である中原校長の提案がすんなりと受け入れられるはずもなかった。英語教員11名中、賛成したのは2名だけだった。「3カ月にわたり、幾度も会議を開き、文書を配布することにより、TOEFL®のリスクも提示・解消しつつ、教師陣を粘り強く説得した結果、賛成意見が反対意見を上回った。英語以外の教員が賛成多数に回ってくれたが、英語教員の大半は最後まで反対だった」と中原校長は当時を振り返る。

こうして導入が決定されたTOEFL®対策の授業は、2011年度の2年生を対象に、学校設定科目「英語超人」(新しい英語科目)として設置された(図表1参照)。TOEFL ITP®からスタートし、その後TOEFL iBT®をも教材として学習し、英語の「読む」「聞く」「書く」「話す」の4つの技能の力を高める学習内容となっている。TOEFL iBT®120点満点中、80点の取得を目標に段階的に学習を進め、実践的な英語力を強化するものである。

「英語超人」では、その質と量から考えて相応の意欲と実力を必要とする。そのため、高校1年次の10月には説明会の実施とともに課題を提供し、10月から12月には講習・小テストを行ったうえで、翌年1月に選考テストを実施している。その結果、2011年度には、選考テストで一定の成果が認められた18名に「英語超人」の選択が認められている。この「英語超人」の枠は現在拡大傾向にあり、2012年4月からは、いずれも選抜試験に合格した1年生80名、2年生24名、3年生18名がTOEFL®対策に勤しむことになる。

伝える力(アウトプット)

中原校長は「論理は世界の共通語」と前置きしたうえで、日本人のアウトプット力について、自分の意見を論理的に構築して伝える力が不足していると語る。言いかえれば「自分の意見をもち」「反対する人をどう説得し」「どのように実現するか」といった「意見→説得→実現」の力である。これからの高校生が活躍する舞台では、たとえ国内に住んでいようと、どんな仕事に就いていようと、世界とのかかわりが不可欠になる。国際的なモノの見方ができる人材、異なる言語や文化をもつ人間とどう共存するかを考えられる人材、世界市場で通用する技術・技能をもった人材が評価される時代になる。

和泉高校では、重点事項にもあるように「自分の意見を堂々と表現できる能力」の育成を重視している。あえて「堂々と」を加えている点は興味深い。そのためにも、自分の意見を正しく相手に伝え、相手の意見を理解する能力が欠かせない。それは言葉でも、文章でも同じであり、これらの力(論理的思考力・表現力、創造力)は、実は大学入試や就職試験といった間近のハードルを越えるためにも大いに役立つという。

これらの力を育成するために、1年生で週1時間行われ

る総合的な学習の時間「IM」をうまく活用している(図表1)。情報科目とタイアップして「意見→説得→実現のプロセス」を体感する和泉高校独自の授業である。論理的思考の基礎を学ばせた上で、全員にパワーポイントを使用したプレゼンテーションをさせる。IMは「Is Me Hour」の略であり、「自ら学ぶ」授業ということで、すべて is me だということから名づけられたという(和泉だから is me という語呂合わせにもなっている)。

こうした取り組みはIM以外の時間にもみられる。例えば美術の授業では、「かなしみ」をイメージして絵を描き、「悲しいのか、哀しいのか、カナシイのか、かなしいのか」を教師や生徒同士で意見を言い合う機会を設けている。それまで正解ありきで空欄を埋めるべく学んできた生徒が、「先生も迷うんだ。先生だってわからないことがあるんだ」という経験をしながら、教師と一緒にディスカッションをする好機になっている。

得意技を身につける意識

「英語超人」や「IM」では、単に英語力を高め、物事を伝える力を育てればよいとは考えていない。その根底には、重点事項の一つである「得意技を身につける意識」の育成がある。これは、中原校長の苦い実体験から導かれたものだ。アメリカで弁護士として駆け出しの頃に、「How special are you?」と尋ねられた際に答えることができなかった。つらつらと自分の経歴を並べるだけの中原校長に、「ここではスペシャリスト以外はいらない」と相手は告げたという。得意技がなければ、これまでの自分の学歴や資格が何の役にも立たないことに大きなショックを受けた。

「日本の社会全体、進学校の進路指導、保護者までが“東大が頂点”とする価値観に支配されていることに危惧を感じた。それを壊したかったのが、教育を志す大前提にもなっている」(中原校長)

和泉高校では「得意技を身につける」という行為にとどまらず、その「意識」を含めた育成を目指している。一芸に秀でた人は、そこに至るまでのコンピテンシーを身につけているので、二芸にも三芸にも秀でることができるといふ考え方である。

英語が得意な生徒には「英語超人」、数学が得意な生徒

には「進路別数学少人数展開授業」と環境を整えた。近年、普通科高校でもキャリア教育の推進が求められており、高大連携も得意技を身につけるための取り組みの一つである。より高い知識の習得に意欲のある生徒を対象に、「大阪教育大学による数学出前授業」「関西学院大学への数学講義受講」「大阪大学でのタンパク質科学実習(SPP/サイエンス・パートナー・プロジェクト)」「関西大学出前実験(「色素増感太陽電池」の制作)」などを行っている。

理系分野との連携が目立つが、「実用的に数学・理科を学ぶ刺激がある」と中原校長は言う。文系分野に関しては、「日本の大学における文系分野の実学が見えづらい」とし、重点事項の進路指導強化の一環として、企業との連携(IT企業経営者の講演など)を進めているのが現状のようだ。

さらに、既成概念を打ち破るような多様な体験の場を設けている。特別講座「平和と国防を考える」では、国際平和を考える機会として、校長自身が制作した被爆者のインタビュー映像を見た後、自衛隊を見学した。また、ハワイと日本の関係を歴史で学んだあと、夏休み前の1日を、教員、生徒ともに「トロピカル」な服装等で過ごす「トロピカルデー」もユニークな試みの一つだ。「誰も思いつかないような姿の生徒こそ褒めてほしいと先生方にはお願いしている」と中原校長。「なぜトロピカル?」と声を掛け合い、各人の発想力・表現力を磨くのだ。こうした経験がないと、社会に出て、いざクリエイティブで勝負しようというときに、柔軟な発想が生まれにくいのだという。

生徒も職員もぬるま湯を脱しはじめた

和泉高校はこの3年で急速な変化を遂げてきた。その成果は確実に現れはじめている。英語では、TOEFL ITP®のスコアで500点以上を取得する高校2年生が早くも5名以上出ている。また、「ぬるま湯」を脱する生徒も現われてきた。例えば、「地元国立大学に現役合格しながらも、もっと世界のいろんな人と接して大きなスケールで社会の役に立ちたいと考え、浪人の末、国際教養大学に進学した生徒」「特別講座「平和と国防を考える」で刺激を受け、自分なりの考えをもち、防衛大学に進学した生徒」「海外の大学に興味をもち、日本を飛び出す気概をもつ生徒」などである。「文化祭におけるシンクロナイズドスイミングチームの創設を目指した生徒」は、想定される反論を丁

寧に解消しながら、教師や近隣住民を論理的に説得して実現に結びつけた。卒業時には「思い出のスライド」を自分たちで制作・披露した生徒もいるという。生徒だけではない。職員会議で若手教師が積極的に発言しだすなど、教職員の意識にも変化が表れている。こうした校内での変化は、志願者数にも影響を与えている。2012年度入試では、定員360名に対して志願者が503名にも及び、大阪府立高校としては2番目に多い出願者数を記録している。

今後のカギを握るグローバルコース

任期最終年度を迎える中原校長であるが、「ハードは作った」という。中でも目を引くのは、「雪だるまの芯」として期待されるグローバルコースの創設である。2012年度入学生以降を対象に、グローバル教育と難関大学突破に特化したコースを設け、9クラス中、2クラスを定員としている(図表2)。校内で難関大学向け指導に適した教員を配置し、1・2年生向けの毎週土曜日の講習や、英語超人などで、生徒を「鍛え、育てる」環境となっている。

このコースでは、いわゆる「特進クラス」として優秀な生徒を別枠で募集しているのではない。和泉高校合格者を対象に、コース選択希望アンケートをとり、グローバルコース希望者は入学前の3月下旬に学校独自の選考テストを受けるシステムになっている。一度グローバルコースに入っても、1年生、2年生、3年生への進級時にそれぞれ、所定の選考テストおよび選考基準に照らし、入れ替えが行われる。

大学も世界基準の人材育成と研究を

最後に、大学に対する意見を尋ねたところ、まず大学における人材育成については、「世界一になろうとする視点で、もっと大胆にリーダーの育成をしてほしい」といった要望が寄せられた。また「金太郎飴のように同じような就活対策を行うのでなく、自分自身と勝負するような人材育成をしてほしい」という。

「例えば、大学時代に自分が突き詰めた研究テーマを、3分、10分、30分、3時間のバリエーションでアウトプットできる人材なら、企業は必ず欲しがらる。実際の営業場面で、

図表2 グローバルコースとスタンダードコース

コース	グローバルコース(2クラス) ＜新設コース＞ 京大・阪大・神大／早大・慶大／米国を中心とした海外大学をめざす	スタンダードコース ＜従来の本校の教育プログラム＞ 関大・関学・同志社・立命館・大市大・大府大・和歌山大をめざす		
1年	コース内で共通科目を学習 ○英語超人 ○IM ○芸術は音楽のみ	コース内で共通科目を学習 ○IM ○芸術は音・美・書から1つ選択		
2年	文系 ○英語超人 ○IM	理系 ○英語超人 ○IM	文系	理系
3年	私立大学	国立大学	私立大学	国立大学
		理系大学	文理(看護系)	理系大学

商品を説明するのと何ら変わらないからだ。3時間語れる知識や情報を3分で語るには、骨子をまとめる力が必要になる」(中原校長)。

さらに「いっしょくたにはできないが」と前置きしたうえで、「世界に誇れる大学づくり」も挙げた。「言葉ではそのように言っている、実際に取り組んでいるのかということ。アメリカでは、映画、ジャーナリズム、ビジネススクールなど、それぞれの分野で有名な大学がどこか、きちんと認識されている。大学での学びが、世界基準に照らして通用する実学であることを示してほしい」との指摘を受けた。その担い手である教員に対しても、「大学人であるからには、世界基準で切磋琢磨してほしい。欧米の模倣や分析にとどまることなく、欧米が腰を抜かすほどのイノベティブな研究成果を見せつけてほしい」といった期待が寄せられている。

大学が、急激な国際情勢の変化の中、次世代を担う若者の教育に携わる機関であることは言うまでもなく、和泉高校の取り組みから学ぶことも多い。中でも、生徒を「(実学を身につけ、社会に貢献できる)人材」としてみつめ、「人材を育てる」ことを常に意識する姿勢からは、大学における人材育成について改めて考えさせられた。

近年、大学の「面倒見のよさ」が注目されているが、「人材」としてのポテンシャルを信じ、「鍛え、育てる」ような環境で過ごした高校生を、大学はしっかりと受け止め、さらに鍛え育てることができているだろうか。

中原校長の体制のもと、和泉高校で3年間過ごした卒業生が、2012年度には輩出される。彼らはいかなる力をつけ、いかなる進路を選択するのだろうか。和泉高校の今後の展開とともに、彼らの今後の活躍も大いに期待したい。 ■

(望月由起 お茶の水女子大学 学生支援センター准教授)
(注1: マーク・ザッカーバーグ。SNS (social networking service) 「Facebook」の創設者。)